

卷
之
二

~ 13
3569
2



門 13
號 3560
卷 2

近世怪談霜夜星二卷

東都

種彦著



海辺のめづら
あまぎの紅絲

今といふ久く昔といふ近き頃うらるるが一つの怪変あり。その
首尾をいふに下徳と武松のあつひは須磨といふ処あり。此
ころは小花方求次郎といふ處士代々館室をひららくふはくり
とよおつるが元来貧賤倉庫まらち。その田英はしてあつぐう家
富榮只秋を詠詩を賦し。数口の家といふのとあつぐうふらふしなる。
前へ渺々たる滄海と朝鳥浪と映し。東は徳房の二列を見えし。
西は高繩芝浦の弓のどく曲り。雲帆矢のどく飛ぶ秋もや文あく

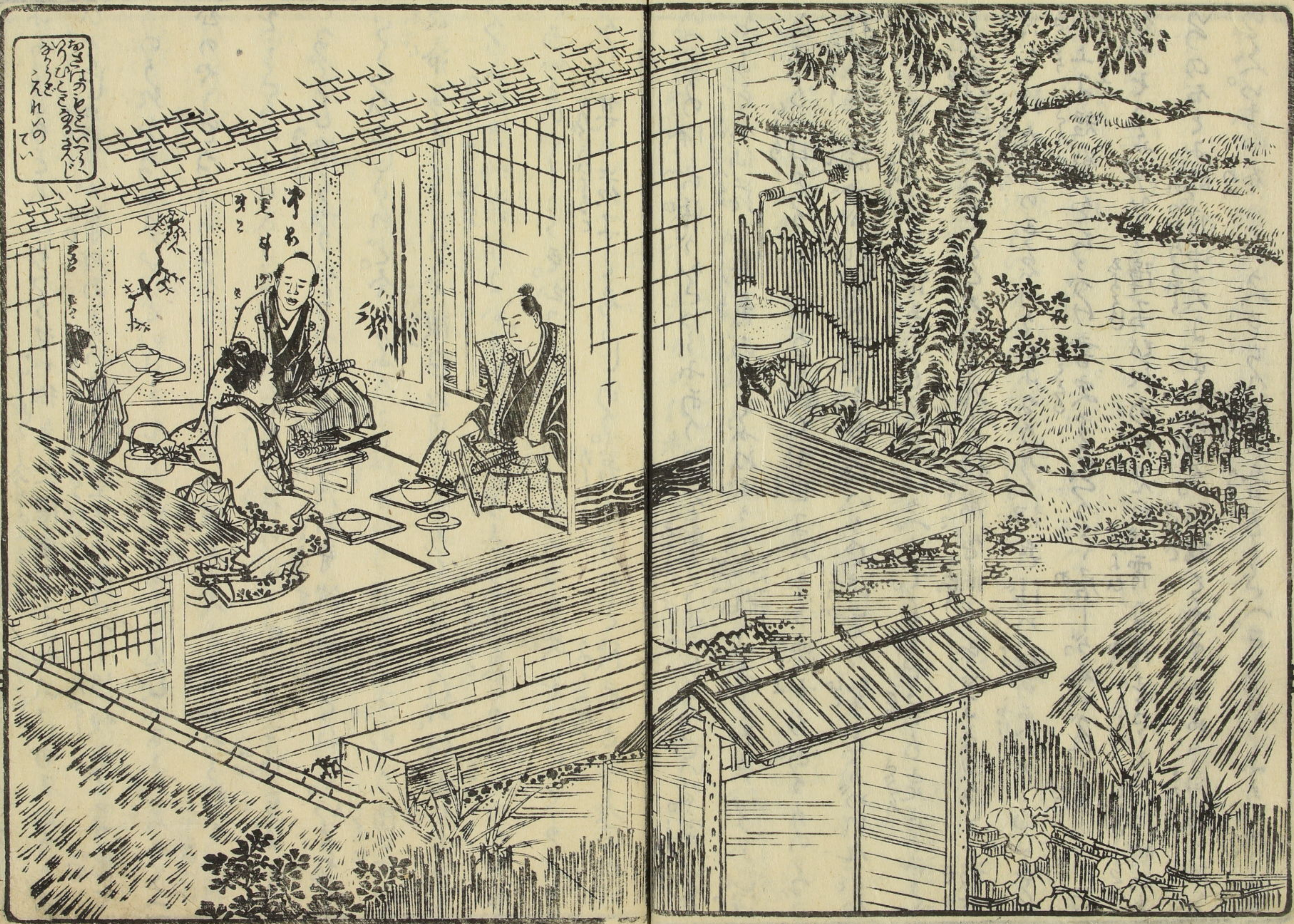
早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 雙
藏 書

中庭前のゆきぢらしをあらそひ強も惜も出たよやとてさ
 うじとあしづねのへごとをね友どち六人四人うち交り求次郎が
 二舎合海辺よ出て道遙一夕日ふるある紅葉も秋の日のく
 れ中をれをかたら既酒もさけるいよかまびたる爰又天羽款次と
 りふのあり彼一人の娘ありて名を款次とよび天性そまきま
 女なればは花方の家の侍女よかうてのちいよく求次郎とへごと
 うくくこらひ今日も娘款次とよめお酒席よつらり居るが
 あや一むべー一ッの蛇款次があとべよつれをひて恰も巴がけ乃
 ちなれさるがごとく彼方へあやめば彼方へつこそひ恨ありげと
 れがげらやう居る人にも怪変よ名ひ款次も何とやうんかも
 うがまごかのれが腰をさすり足葉袋の根つけは蛙の形を
 取る。と蛇をど怒念かまらじきめのへあはは蛙をえつと
 らんと投出せば蛇のうとしけよひねらへ草をこけてつらり
 何とやうんかふらうらる画めらふと別を告ぐうらり席よあ
 人口くふ蛇の怒念まきまに返さる出れば求次郎うねといふ
 蕭蕭の二女ごどりの髪の蛇と化し雉のあづりめのかけて蛇と
 の類昔今おがらふいやつづといひさし款次よむらひ用夏あ
 らんよへめをさるまべし少時は席を遠ざくべしといひひりへ
 人てみむらひ彼款次よ蛇のつれそふといひ板初の夏もど
 へる女の一念うらんとよふとあり長物語うらやめ(と孟
 あげ腰扇うららるしこころ出るへ近を頃旗ヶ谷のわらみ
 田王計といふ者あり年四十といふ春の頃より風のららと

中庭前のゆきぢらしをあらそひ強も惜も出たよやとてさ
 うじとあしづねのへごとをね友どち六人四人うち交り求次郎が
 二舎合海辺よ出て道遙一夕日ふるある紅葉も秋の日のく
 れ中をれをかたら既酒もさけるいよかまびたる爰又天羽款次と
 りふのあり彼一人の娘ありて名を款次とよび天性そまきま
 女なればは花方の家の侍女よかうてのちいよく求次郎とへごと
 うくくこらひ今日も娘款次とよめお酒席よつらり居るが
 あや一むべー一ッの蛇款次があとべよつれをひて恰も巴がけ乃
 ちなれさるがごとく彼方へあやめば彼方へつこそひ恨ありげと
 れがげらやう居る人にも怪変よ名ひ款次も何とやうんかも
 うがまごかのれが腰をさすり足葉袋の根つけは蛙の形を
 取る。と蛇をど怒念かまらじきめのへあはは蛙をえつと
 らんと投出せば蛇のうとしけよひねらへ草をこけてつらり
 何とやうんかふらうらる画めらふと別を告ぐうらり席よあ
 人口くふ蛇の怒念まきまに返さる出れば求次郎うねといふ
 蕭蕭の二女ごどりの髪の蛇と化し雉のあづりめのかけて蛇と
 の類昔今おがらふいやつづといひさし款次よむらひ用夏あ
 らんよへめをさるまべし少時は席を遠ざくべしといひひりへ
 人てみむらひ彼款次よ蛇のつれそふといひ板初の夏もど
 へる女の一念うらんとよふとあり長物語うらやめ(と孟
 あげ腰扇うららるしこころ出るへ近を頃旗ヶ谷のわらみ
 田王計といふ者あり年四十といふ春の頃より風のららと



ちよんがわんげん
 へびとあつてのま
 ちよんがわんげん
 こころんかた
 ららむ



あまのこゝろをいかに
かりしとてかまひ
せんれいの
てい

月夜草子

月夜草子

その二
いひやうかひやう
をこまのひておまの
めいこふまのま



第二回 六浦とたけ
ふがひの橋

休題且話快保が側女於花へいつつとあつて。伊原の家より
一とふ。往年は立木林観音兩腰の茶亭より娘は伊原浦
無想。彼人よりして下細らちとくへくもあひのさうしが。その夜不
意雲舞半六といふ光棍ふとつれ姉の和田山より殺害する。これ
あひのちらぬら命を幸じてととく。それらう半六の於てたを濟
る武孫國より。名ある柳巷に賣りこさんとす。これへは火子
へうと泣いて一切のものをうへど。浅きうらなれ娘とみる。一度客は
もつろめをうらつるよ。いづくへ去らうとも死ねべいと口をいれ。容
貌へ余乃たれと悪棍の勾引せしを知り。名ある娼家よりへ誰あつと

ろるべしとむよめい浪らゆる末のねよ女のあざしあめをさよよはし
 へ清浦抄ふえそと。又古今集よも君をあらてあざしあめをさよよ
 こそこれが復もむれとひとしめあめひもて。こが庵のうせ貝の保保が
 家よあらざるに成まじり昔を三つよもつとせ一日とある彼唐土
 の名妓が隠語をめらひ又よむをさあそく思ふべしといふ花吹雪談を
 るべしと病も煩よ愈ゆるらむし。その夜の枕をそれとわびりも
 やらむせ一日をこそそよらむらむら。わざとくその日ふもあうそれ病床
 をあそく湯とひさ髪をけづりけ子よむつてひひるへされぬ旗が
 谷の何某がめらへ逃れざる夏ありて熱んとあめひ湯をひれらるが
 むふとやうん又さらあ〜也身此書簡をめらく彼所よあめむき。
 如此このところのよべし。路のわざもさよよをわらふ今宵の何某のめと

一宿一明日久るべしとさよよく又賺さられば於此此もむつどい
 ほどいへて出ゆら。伊去清の只日のこぶくを待たふれど天公うら
 どりこのあねとあじど。秋の日あうらむかそしとあめひ日びとあ
 初更もむられれば度されよありこら。あな築地ようらて保保が
 をうらふよとあてそのめあけとあざしく。築地よ梯子をうけあねら。
 心ゆく思ひこへ伊菰の前裁をうらえれば萩萩落つらくの秋
 葉あもつらふ咲もれらる。星のひうらふわのええと。月の夜
 うらもるゆえとらあやし。家居つらぐく南面よ障子よそま
 一燈火いとあそりるべ。かそく風入りのぞとさるるふ調度もさ
 のくわらうとびと今浮くうとええと柱をまらべし。琴をさるら
 よかり。香炉よ火ありて白ひとのりうらうら。髪をさるらふ節

うくゆりくけしる女。白く玉をのべらるるを膝のうへよりさへお
 めひるる。さへ何となく心をどげよええとて。遙かこのさう十
 二三なる女童より来り何やらんひそくおざらふよ一人ありた
 ろうで。彼女外のうをむねける面をえられ。さうぶらうもそれ
 子あり。胸へ裏の袴はふとぶら。女童が来りぞれいづるをもち。不
 とくと障子をむらうをかまへるへ。袴はれも若や彼人ありやと。
 障子がひらけ伊去清と云るより。さうかめひめふけしとてさう。
 少時顔顔を紅まじし扇をとつて。燈火をあらけけら。此処いと
 ちとさう人のえらるるあはれは。方来りて右のふと銀鏡をとりそ
 盤のむねを撥あげた。伊去清が心を携へ。幾回うへでとて。何国よとも
 うひる。流石ふ二人の言葉もさう伊去清目にして。これ子と見れ



うくゆりくけしる女
 のうかろねをさへ
 ひとのあへらるる



面衣の世帯

十九

わがやうな世帯の世帯
よき世帯の世帯の世帯
かきかきかきかき
いひひひひひひ

夜屋敷

